

書 評

.....

Klaus Riesenhuber : Die Transzendenz der Freiheit zum Guten. Der Wille in der Anthropologie und Metaphysik des Thomas von Aquin. Berchmauskolleg Verlag, Munchen, 1971, vii+411.

稲 垣 良 典

リーゼンフーバー教授によるトマス・アキナスの意志の形而上学の研究については、第十七回中世哲学会における発表（昭和四四年十月，関西大学），および『カトリック神学』第十七号（昭和四五年六月）の論文「自律と自由—トマス・アキナスにおける人間論について」などでその一端に接していたが，このたび Pullacher Philosophische Forschungen の第八巻として刊行された著書でその全容があきらかにされるにおよんで，同教授の包括的で厳密な研究にたいしてあらためて尊敬の念を深めたいである。

はじめに本書の内容についてごく簡単にしるし，そのあとで二，三の感想をのべることにしたい。

第一部は意志をその対象たる善の側から理解しようとする試みであり，善の存在論的考察を通じて意志の本質へ迫ろうとするものといえる。第一章で能力，働き，対象などに関する基本的考察を行ったのち，第二章で意志の対象たる善がとりあげられる。善は一方においてたしかに定義不可能であるが，他方およそ知的認識を行う者は，かれのいわば精神の本性からして善とはなんであるかを知っているのであり，その意味で善の本質は知的認識者にとっての所与にほかならないことが示される。しかし，そのような根源的な善把握はいまだ背景的・暗黙的なものとどまり，それを明示的な認識へとたかめるためには，われわれにとってよりあきらかな善のあらわれから出発して，善それ自体の認識へと進まなければならない。このような出発点として役立つのは，善をその結果からして捉えたものである「善とはすべてのものが欲求するもの」という定義である。そしてこのような欲求あるいは傾きを生ぜしめるところの目的——つまり善の目的因果性——を探るといふ仕方で，まず善への接近が試みられる

のである。なおここで論じられている善の定義、および目的（原因）が諸原因の原因たること——善の目的因果性の根源的性格——については、のちにそれらにふくまれている深い意味があかるみに出されることになる。このように同一のテーマが異った角度からくりかえしてとりあげられ、その都度より深い意味があきらかにされてゆくのが、本書における叙述のひとつの特徴である。

ところで、意志が善によって動かされる——善の目的因果性——ためには、善が認識されていることが不可欠であるところから、第三章では善の目的因果性を媒介するところの善の認識が考察の対象となる。ここで、意志が認識を前提し、或る意味でそれに依存しつつも、その自律、自由を失わないのはいかにしてか、という問題が生ずるが、著者は二つの方向からこの問題に接近する。ひとつは、認識は事物の本質のみにかかわるのではなく、むしろ本質の相の下に存在者そのものが捉えられるということであり、もうひとつは、意志は認識によって善へと規定されるのではなく、認識の役割はむしろ善にたいする意志の開き、あるいは傾きを特殊化するにとどまる、ということである。この後者は、のちに目的と対象、目的因果性と形相因果性との区別を通じて議論されている。

第四章では、意志にたいする善の働きかけ——善の目的因果性——をそれ自体においてさらにあきらかにするために、意志の第一の根本行為たる愛が考察される。すなわち、われわれはふつう、目的因たる善がわれわれを意志や行動へと動かすという語り方をしており、欲求がわれわれにとって第一にあきらかな意志行動として受けとられているが、これは意志行為の発端的な理解であり、その根拠をさぐることによって根本行為たる愛がつきとめられることになる。愛は「主体の内奥——その究極の現実性たる存在——からする、善への自発・自由なる応答」であるとされているが、この定義はつぎの重要な洞察をふくんでいる。第一にそれが主体の内奥からの行為であるかぎり、愛は自発・自由ではあるが、けっして恣意的ではない。第二に、愛は究極の現実性たる存在から、つまり積極的な存在の充溢から発出するものであって、主体のうちなる欠如からして呼びおこされたものではない。

意志の根本行為が右の意味での愛として捉えられることは、善の目的因果性に関して、したがってまた意志との関係における善の本質に関して、深い洞察

への道を開く。すなわち、この因果性は意志主体を（作用因的に）動かすというよりは、意志主体をその閉鎖性から呼びさまし、解放して、その固有の作用因果性を発動せしめるものである。ここで著者は、意志行為を構成する本質的要素として、善の影響と、意志主体に内在する能動性ないし現実性とを区別する。著者はこの二つがトマスにおいて統一的に捉えられていたことを示しているが、そのことは、この二つの分裂を通じて形成された近代哲学における意志概念を理解するための手がかりを与えてくれる。

第二部では、これまでの考察を通じて生じた種々の問題について基礎的な考察がなされ、第三部への移行が準備される。まず第五章では認識と意志とが比較されるが、この二つの作用の区別根拠はあくまで、作用が精神自体のうちにとどまるか、外なる事物そのものへとむかうかということであり、具体的現実からの抽象の程度によるという通説は根拠がないとして斥けられる。興味深いのは、右の区別根拠にもとづいて、精神自体のうちにとどまるものであり、その意味で自己完成的な認識作用の優位をひとまず承認しつつも、最終的には意志の優位が同じ区別根拠からして主張されていることである。すなわち、トマスの場合、神は精神的能力にとっての任意の対象ではなく、むしろ精神的能力がそこにおいてのみ究極的完成を見出すような唯一の最終目的であるが、そのような神への到達は（さきの区別根拠からして）知性よりはむしろ意志の本質を構成するものであり、したがって最終的には意志が知性に優越する、という解釈である。この解釈は、トマスの立場がいわゆるギリシャの主知主義ないし幸福説と軽々しく同一視されることにたいする警告として、いいかえると、現在の生（in statu viae）における意志の重要性をあきらかにしている点で適切であり、高く評価できる。

第六章では認識と対比させつつ、意志の根本行為たる愛と、第二次的行為たる特殊的善の欲求について、それぞれの本質および相互関係が考察される。ここでは、愛において逐行される意志主体の完全な自己還帰・現存が意志の自律・自由を基礎づけるものであるが、この自律・自由は、認識を媒介とする第二次的意志行為においても否定されるのではないことの詳細な論証が重要と思われる。

第七章では意志と認識との間の相互影響、相互包含ないし滲透が論じられ、

とくに親和性 (connaturalitas) による認識の問題がとりあげられる。この種の認識はその根源と終極とを愛のうちに有するものであり、キリスト教的観照および至福直観はこの意味での親和性による認識として理解され、その点でギリシヤ的テオリアと対照せしめられている。第八章では、意志がたんにひとつの働きではなく、あらゆる能力を働きへと動かすところの、働きの根源型態であり、もっとも本来的な意味で働きであることが示される。

第三部は意志を、その根源である精神の内奥なる存在からして解明しようとするものであり、第一部とちがって、対象たる善の側からではなく、主体の側から意志の理解が試みられている。そのため、当然トマスにおける精神的経験への引照が多いのがこの部分の特徴である。このような意志作用の主体的理解のために、働きと形相との関係に考察がむけられるが、形相の根本的な理解をめざして、まず第九章では形相と存在との関係が詳論される。

著者による形相理解の特徴は、形相をたんに本質原理として、つまり本質領域では現実性の原理であるが、究極の現実性たる存在にたいしては可能性の原理にとどまるものとして捉えるのではなく、存在にたいしても積極的な影響を与える原理として捉えようとしているところにある。すなわち、形相は存在の形相因として、存在現実性にとっての積極的な根源であり、逆にいえば、存在は自己の必然的な完成を形相から受取るものであることが指摘される。ここでの考察のかなめになっているのは「形相が存在を与える」というトマスの基本命題であるが、著者はこの命題の意味を、どのような仕方で形相が本質を、ついで存在、統一性、個性性を基礎づけるかを詳しくたどることによってあきらかにしてゆく。

第十章では形相と働きとの関係に考察が移行し、まず有限者の働きがどのように形相によって規定されるかが一般的に論じられる。ここで有限者の働きの欲求は、まず(1)個体的存在の保全にむかい、ついで(2)種の維持にむかうが、最終的には(3)世界内のあらゆる存在者の肯定へと秩序づけられていることがあきらかにされる。(1)はわれわれにとってもっともあきらかな欲求ないし傾向であるが、有限者にとってそれ自体においてもっとも根源的なのは(3)であり、そこにおいてはじめて有限者は自己の端的な意味での完全性を見出す。それはさきに論じられた、意志の根本行為としての愛であり、(1)ではなく(3)が真の意味

での自己愛であることが示される。ところで、意志ないし愛は善一般へではなく、具体的な実在としての善へとむかうものであるから、有限者のもっとも根源的な欲求は最高善なる神へのそれであり、愛をもってする神への自己超越において有限者は自己へのまったき還帰、したがって自己完成をとげるものであることが論じられる。

第十一章ではより特殊的に、意志作用を精神的形相からして理解しようとする試みがなされている。このように、精神的欲求たる意志の超越的根源を探求して、著者は精神の自己還帰、すなわち自己自存・自己認識としての精神的形相をつきとめる。しかし、そこで同時に、意志をその根源たる形相のみによって理解しようとする試みの限界が指示され、意志の動的構造の理解のためには、意志を直接に動かす原因たる神へとさかのぼることの不可欠性があきらかにされる。さらに自己への還帰が無限者への自己超越を準備するものであり、裏からいえば自己超越が自己還帰・完成の根拠であるという有限者の根本構造をいいあらわすものとして分有が論じられる。そこで分有は精神的存在にとって経験的な出来事であり、愛においてその完成を見出すものであることが指摘されている。

結びの第十二章においては、これまで考察されてきた有限者の自己実現としての働き（その根本型態が意志である）と、他者にたいする自己分与的な働きかけとを、統一的に捉えようとする試みがなされている。この二つは意志、とくにその根本行為たる愛において一致しているのであり、著者はその解明のために「善は自らをおしひろめる」という、ネオ・プラトニズムからトマスが受取り、変容せしめた基本命題をとりあげる。この命題の解釈をめぐって生ずる一からの多の発出、善の自己分与（創造）と自由との関係、などの難問の処理は見事であり、著者の力量と、トマス自身の精神的経験への深い透入を示すもののように思われる。

著者によるトマスの意志の形而上学を理解は、善の光の下に遂行される存在把握と、愛にみちびかれる精神の自己理解とが根本的に一致することの洞察、としていいあらわすことができるのではなからうか。

本書で深い興味を覚えた箇所は数多あるが、それらのひとつひとつについておのべることは不可能なので、つぎにそのいくつかを枚挙するだけにとどめたい。

(イ) トマス哲学における存在論と哲学的人間学、あるいは精神の形而上学、倫理学および一般存在論の根源的な統一の問題。

(ロ) トマスの主知主義のふくむ諸問題。

(ハ) トマスの知識論ならびに精神の形而上学におけるプラトニズムとアリストテリアニズムの総合の問題。

(ニ) トマス後期の著作における意志（とくにその自由の基礎づけ）および愛の把握の成熟とその背景の問題。

さいごに一、二個人的な所感と希望をのべることを許していただきたい。第一に、本書を読む者は著者がそのトマス解釈を丹念に、トマスの数多くの著作からとりだしてきたテキストによって裏づけている知的努力に感服せざるをえないであろう。しかしそれよりも、これらのテキストにおいて結晶しているトマスの精神的経験、いいかえるとトマスの生命あるいは存在自体に迫ろうとする著者の努力のほうが高い評価をうけるべきものであると思う。第二に、わたくし自身としては、本書によってトマスのいくつかの基本命題に関してより深い洞察を与えられたことに感謝したい。一つだけ例をあげると、自然的傾向についてのトマスのテキストについては、自然法論との関係でこれまで何度も熟考を重ねたが、著者が本書で示されたような明快な理解には到達できなかった。第三に、著者がいつか本書で詳論されたトマスの意志および自由の形而上学を、アウグスチヌス、アンセルムスからドゥンス・スコトゥス、オッカムにいたる中世の意志・自由意志論の歴史のなかで位置づけて下さること、さらに恩寵の神学との関係でより具体的に論じて下さることを希望する。